によつて、外國法採用、咀嚼の程度を闡にせんとし、親等、戸籍給田制、婚姻相續等の一々に就いて詳細の論を試み、「親子關係を中心としての家族制度」に於ては、上古の神話傳說の研究より始め、姥捨山古傳說についても、棄老の風習の存在を排し、寧ろ老人優遇の事實ありしを說けり。又中古に於ける子の賣買、殺害に關する律の規定、鎌倉時代には武斷政治がこの法制上に與へたる影響、或は致仕、勘當、不孝、義絕、財產讓與等の法規を研究し尙ほ、戰國江戸時代の家族制度の變遷を綜觀して、上古に於ける親子の親密は中古外國法の摸倣によりて、往々、親の權力を抑制し、習慣法の發生となり、親の權力又確立して、戰國時代に於ては家長專制の風の生ずる所以、江戸時代に於ては家族制度の大成ありしも、士分と農民との間には親子關係に族ては法制上相違の存在せしこと等を說く等、資料の撰擇と論旨の精透なる著者の獨有の壇場たる感あるものあり、其他の篇中「法制史總論」は日本法制の系統、律令格式、乃至武家法の制定發達、及び其等に關する既往諸家の研究等を懇切記述し一般法制史研究者の爲め好指針たるを失はず、又「五人組制度の起源」「德政の研究」「座」の研究に關する諸篇の如き是れ著者が或は周匝なる論議により、或は新史料の探究によりて當時の學界を賑はしたるもの、已に定評の存する所なり。而して本書收むる所の大小諸篇は固より一個の系統的叙述にあらざれども、是れ著者か法制史の研究に身を委してより已來斯方面の開拓に盡瘁したる一の記念碑たるを思はしめ、近時法制史に關する研究は其進歩なきにあらず、又之れに關する著書の出でざるにあらざれども、而も未だ大に斯學の爲め氣を吐くに足らざるに、獨り此大著の出現を見たるは法制史界に眞獻寄與するは言ふを須ひず、又學家の偉觀たりと謂ふべし。（岩波書店發行價五、八）〔西田〕

◎攝津鄉土史論　一册　日本歷史地理學會編

大正六年八月、兵庫、神戸及び瀨戸內海を主題とせる夏期講演會の講演筆記に大阪府史蹟調査會に於ける講演筆記三編を添へたるものなり。上代の武庫地方（喜田貞吉）武庫は對岸の意より出づゝて武庫の歷史、西宮夷神、武庫地方の古墳に言及し、福原遷都は（大森金五郎）新都の位置を考證して所謂福原の地をこれに擬し、平清盛論（辻善之助）彼が非難さるゝ敵に對して殘忍なりしとの事は事實に非ずして寧ろ寬裕なりきとし、後白河法皇を幽し奉りし態度は何等辯護すべき餘地なけれど、其赤裸々なるは藤氏の陰險に比して寬恕すべき點あり、彼は時流を超越したる偉人にして、武家政治を開始せし事は日本文化の一特長なりとし、一ノ谷の戰（黑板勝美）は院、賴朝、義仲、平家の四勢力の平均を打破し時代の轉換者たりし義經の人物論より始て一谷合戰を說き、湊

川の戰（堀田璋左右）は兵庫、湊川、生田森の戰を述べ、楠公崇拜に就きて（三上參次）は楠公に關する系圖古文書に僞物多きは公が追慕さるゝ事の大なりしを示すものにして其後世より崇拜さるゝに至りしは太平記の流行與りて力あり、而して楠公に對する批評は時代によりて變遷ある事を指摘し、瀨戸內海（內田銀藏）は瀨戸內海の範圍に廣狹二義ある事を注意して日本文明と瀨戸內海との關係を考察し、兵庫灣の研究（三浦周行）は兵庫が天然の形勝にありし外に人爲的設備修築の加へられし事より、福原遷都は政治都市として不適當なる事を明かにせしも、商業都市としての價値は毫も減ぜずして中世に於ける交通上の要衝に當り、關稅の收入の莫大なりしが、應仁文明亂以來、政治上軍事上の原因によりて其地位を堺港に讓れるを說き、攝海防備史（藤井甚太郎）は寶永鎖國令は紙上鎖國に過ぎざりしが如何にして武備鎖國になりしかを說き、國防地帶は四大區に分ちて見るべく、其攝海は嘉永安政に着手せりとて安政元年露艦攝海來舶前　及び文久年間に於ける攝海防備、元治元年攝海防禦指揮として德川慶喜の就任を述ぶ。兵庫開港（岡部精一）は開港談判の發端に筆を起し、大阪江戸の兩都及び新潟、兵庫の兩港の開市延期橫濱鎖港談判を說き兵庫開港の勅許を述ぶ。外に附錄として三島地方の古戰、難波の京、及び豐島地方の古代（以上喜田貞吉）あり、數葉の口繪と挿圖とを收む。たゞ攝津地方の地圖なきは惜むべし。菊版五一四頁（仁友社發行、定價二、八〇）

●日本法制史書目解題　一册　池邊義象編

本書は上篇主要法令書目中篇一般參考書下篇は部分參考書に分ちそれ〳〵參考書目を擧げ或は解題をなし、或は其の書の目次を示し或は又法令の項文を收めて八百餘頁の大册をなせるも、目錄を擧ぐるに一項一行を充つる爲め每頁餘白多く、例せば新編追加、建武以來追加の目錄のみに四十三頁を費したるが如き他所記述と覈比して煩簡厚薄所を得ざる感なしとせず、又御成敗式目の項中に、附、建久以後の宣旨として、三代制符、公家新制等を收めたるが如きも、我法制史研究の基底をなす公家法と武家法とを混同せるものにして初學者を誤らしむる恐なしとせず。更に本書の書目索引を闕ける事も此種の著書として最も大なる缺点たるべく、其他の点につきても著者十年苦心の成果なりといふに於て吾人の期待を裏切ること多し（大鐙閣發行、價四、五〇）〔以上中村〕

●新庄古老覺書　一册　常葉金太郎校訂

本書は出羽國最上郡の新庄に關する唯一最良の史編にして、而も傳寫極めて希れなるもの、今舊藩主戸澤子爵家の出資により、同地出身の國史專攻の文學士常葉金太郎氏が苦心の校訂を經て刊行されたるものなり。新庄古老覺書は、參訂者の考定によつて、